

安曇野市平和都市宣言制定10周年企画 安曇野から平和を思う～上原良司生誕100年～
(2022年9月11日～12月28日)

平沢 重人

1 はじめに

安曇野市は、小中高校生を含めた137点の公募をもとに、2012（平成24）年12月19日「安曇野市平和都市宣言」（以下宣言）を制定した。宣言パネルは、2015（平成27）年11月21日に植樹された「被爆二世アオギリ」とともに、安曇野市庁舎東玄関北側に設置されている。今年、宣言制定10周年であると同時に、特攻出撃の前夜に鹿児島県知覧基地で「国を愛しても、操縦桿を採る器械となつてはいけない」と記した上原良司生誕100年の年でもある。



1945（昭和20）年4月調布飛行場搭乗機「飛燕」の左翼に座る良司
(安曇野市文書館)

ロシアによるウクライナ侵攻を目の当たりにしている私たちは、平和を維持することの困難さを痛感している。上原良司が記した1943（昭和18）年からの日記や関係資料、宣言制定に向けた検討資料を通して、平和や戦争について考える機会とする。

2 上原良司略歴

有明村（現安曇野市穂高有明）の「有明医院」を引き継いだ良司の父寅太郎は医師として、また村助役として活躍する。その上原家の三男として生まれた良司が注目を浴びるきっかけとなったのは『きけわだつみのこえ』（岩波文庫・1982年）である。巻頭に昭和20年4月上原が帰郷した際に記した「遺書」が掲載された。

〈略歴〉

- 1922（大正11）年9月27日池田町中鵜鵜山で医師寅太郎、与志江の三男として生まれる。
- 1935（昭和10）年3月有明尋常高等小学校卒業／4月松本中学校（現 松本深志高校）入学。
- 1940（昭和15）年3月松本中学校卒業／浪人し東京英数学院に学ぶ。
- 1941（昭和16）年3月慶應義塾大学経済学部予科入学
- 1943（昭和18）年9月予科繰上卒業／10月慶應義塾大学経済学部本科入学、『クロオチェ』に「遺書」を記す／10月21日学徒出陣壮行会／12月松本五〇連隊入隊
- 1944（昭和19）年2月9日熊谷陸軍飛行学校相模教育隊入隊／3月24日館林教育隊にて飛行操縦訓練開始／7月20日熊谷陸軍飛行学校卒業／7月31日第四〇教育飛行隊分科基本操縦教育（知覧飛行場）／11月25日分科基本操縦教育終了／12月9日第11錬成飛行隊錬成教育（目達原飛行場）

1945（昭和20）年2月10日陸軍少尉／4月4日常陸教導飛行師団へ転属／4月6日帰郷、「遺書」を記す／4月16日第五六振武隊編成（水戸市）／5月10日「所感」を記す／5月11日陸軍特別攻撃隊第五六振武隊員として沖縄嘉手納湾上の米海軍機動部隊へ突入戦死22歳／5月11日陸軍大尉

1946（昭和21）年5月15日葬儀

3 日記から見る良司の戦争

(1) 軍教育

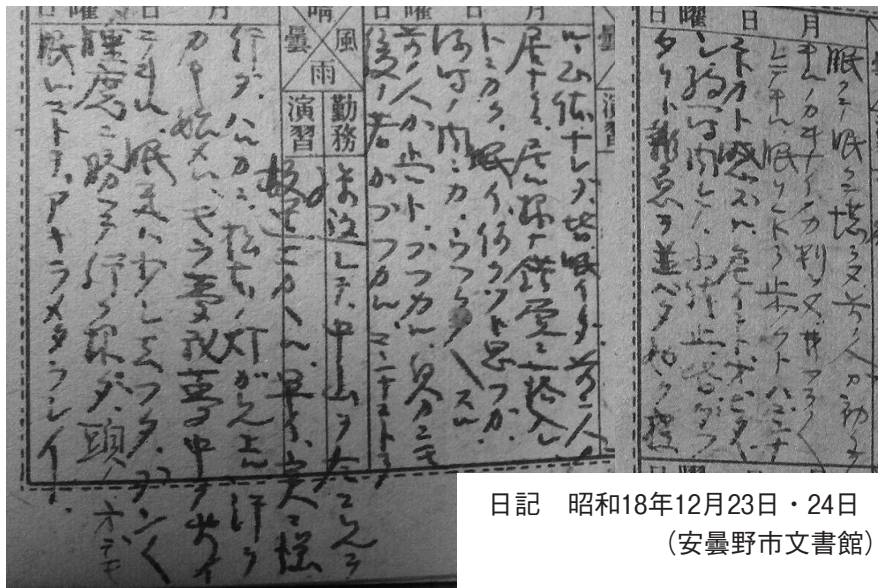
良司は、日記以外に手帳や愛読書、ノートなどに多くの手記を残している。この企画展では、「戦陣手帳」「修養反省録」等に記された良司の言葉から召集された学生にとって太平洋戦争はどうであったのかを考えてみたい。

良司は、1941（昭和16）年4月慶應義塾大学経済学部予科に入学する。同年10月「在学徴集延期臨時特例」が公布され、学徒兵が組織される。まさにその当事者であった良司は、昭和18年10月に学徒出陣を迎える。「10月18日、学徒出陣壮行会。制服制帽、8：00外苑競技場、キャハン」とノートに記している。

陸軍入隊当時の文章には、厳しい軍の訓練の中で、自分自身の成長と日本国軍人としての成長を重ねて記しているものが多くみられる。



左：京谷少尉 右：上原 「アルバム」
(安曇野市文書館)



日記 昭和18年12月23日・24日
(安曇野市文書館)

昭和18年12月23日・24日

(略) 眠くて眠くてたまらぬ。前の人動いているのかいないのか判らぬ。ふらふらしている。眠りながら歩くとこんなことかと思えず。危ないことおびたしい。約一時間して小休止。皆ぐったりと雑魚を並べた如く寝る。正体なしだ。皆眠いのだ。前に人がいないのに、いるような錯覚に陥る。とにかく眠い。何こそと思うが、何時の間にか、うつらうつらする。前の人止まると、ぶつかる。自分にも後ろの者がぶつかる。こんなことを繰り返して、中山を左に見て坂道にかかる。早い。実に強行だ。はるかに松本の灯が見える。汗をかき始める。もう無我夢中で歩いている。眠気は少し去った。だんだん睡魔に勝っていくようだ。頭の方でも眠ることをあきらめたらしい。(略) 朝も昨夜の舎営中のことでびんたを貰ったが、夜も計器の手入れが悪いとて総びんたを貰う。一つ毎に自分という人間が完成されると思うと有難い。

(2) 兄龍男の仇討

昭和19年1月18日

(略) 帰るとて並んだ際に班長殿より蓋螺がいらが飛んでいることを注意され、初めて気づく。何時失なてきだんとうったか判らぬ。点検不十分といえよう。昨日もやったのであるが点検しなかった。午前中にも擲弾筒を使ったが、点検しなかった。点検の不十分から恐るべき結果を生じてしまった。誰が失くしたかも判らない。しかし誰でもない自分の責任だ。この罪は死して補うより外はない。しかしながら特別操縦見習士官の試験を二月に控えて、これを通してからでもおそくはない。龍兄さんの仇を討つと共に死によって解決されること多し。

昭和19年2月7日

(略) 夕食時、松本班長殿に呼ばれ特別操縦見習士官に合格、九日六時二分発の列車にて出発の旨を告げらる。二十人ばかり落ちて十七人合格とのこと。希望通り受かり、心中この上の喜びなし。このことは予め期しており、早く命令が来ないかと念じていたが、遂にその日は来た。この嬉しさを何にたとえたらよいだろう。龍兄さんの仇を討つ日は近づいた。いろいろお世話になった教官殿、松本班長殿には何と言って御礼を言ってよいか。明日の昼は将校集会場で、部隊長殿との会食があるということだ。この上は一死奉公を以て国家の自由のため潔く神とならん、ああこの喜び。(略)

良司の兄、海軍軍医龍男(二男)は、良司が出陣壮行会に参加した翌日、南太平洋で潜水艦乗船中に戦死している。それ以降、良司の日記には「龍兄ちゃんの仇を討つ」の文言が多く登場する。入隊を前にした9月、愛読書『クロオチェ』の見返しの遺書と題して次の言葉を記している。「直接国家に尽くすことが間接に御両親様の御恩に報ゆることと確認しております。私は喜んで去って行きます。私は戦死しても満足です。何故ならば私は日本の自由のために戦ったのですから」とある。強い言葉で自分の意思を表している。

(3) 軍への戦況伝達

大戦中、軍の中核は、国民の戦意高揚のために報道統制を敷く。軍の内部では戦況についてどのように共有されていたのかを良司の日記から見てみたい。2月17日トラック島の敗戦や6月に起きるマリアナ沖海戦、19年後半から激化する本土空襲について記されていることから軍内では、ある程度情報共有がなされていたように思われる。当時の「大本営発表」を報じる新聞やラジオとは違っていたことがわかる。

島クツラト
來襲敵部隊撃退
空母巡洋艦等四隻を撃沈破
我が陸海軍部隊勇戦

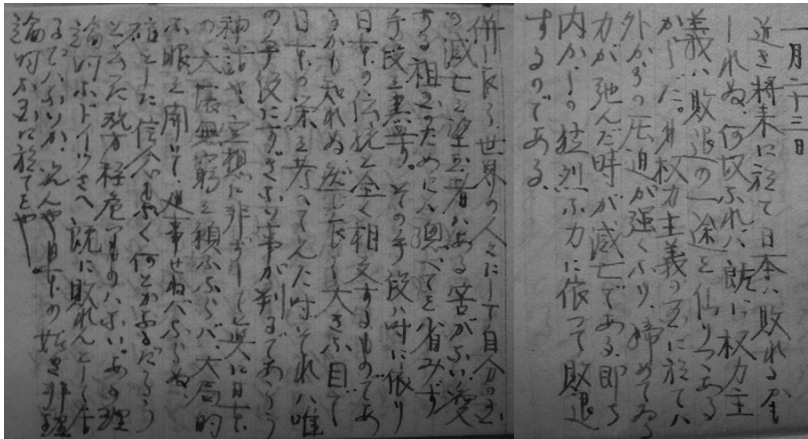
大本営発表 (昭和十九年二月二十二日) 「トラック」諸島に來襲せる敵機動部隊は同方面帝國陸海軍部隊の奮戦により之れを撃退せり
本戰團に於て敵巡洋艦二隻(内一隻戦艦なるやも知れず)撃沈、航空母艦一隻及軍艦(艦種未詳)一隻撃破、飛行機五十四機以上を撃墜せしめ我方も亦巡洋艦二隻、驅逐艦三隻、輸送船十三隻、飛行機百二十機を失ひたる外地上施設に若干の損害あり

信濃毎日新聞

昭和19年2月22日

(4) 全体主義と自由主義のせめぎ合い

個人が自由に表現することへの圧迫の中で、1年半を過ごしてきた。上原はその間、自由主義の勝利と全体主義の敗北を予知している。昭和20年4月、沖繩戦への特攻を命じられた良司は、最後の帰郷をする。穂高に向かう車中で目にした国民の姿をこう記している。「或る者は雑談にふけり、或る者は悠々と煙草をくゆらし、クッションにもたれ、戦争何処に在りやという顔付をしている。(略)我々が体当たりした後も、幾日かはこういう風景が続くことは、疑いの余地がない。日本人の戦争徹底視は、未だなくてはおらぬのだ。」自分の死後、自分が願う自由主義国日本を国民が建設してくれるのか疑念を抱いている。



「メモ・ノート」
昭和20年1月23日
(安曇野市文書館)

4 平和宣言

(1) 旧5町村

昭和50年代、米ソを中心に軍備拡大へと進む国際情勢の中で、唯一の被爆国である日本は、各自自治体において「非核・核兵器廃絶」を訴える平和宣言を制定する。安曇野市の旧5町村においても同様であった。

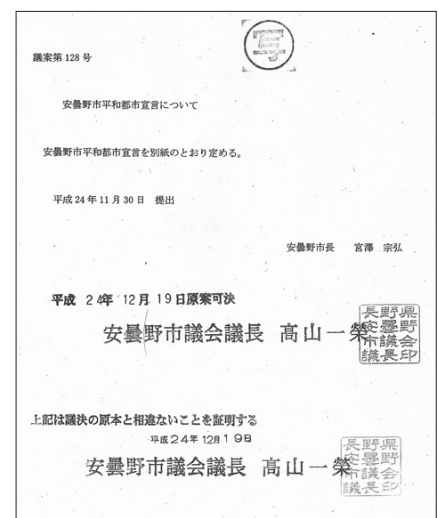
- ・1985（昭和60）年6月24日 穂高町「平和都市推進の宣言」
- ・1987（昭和62）年12月15日 豊科町「非核平和都市宣言」
- ・ 同 12月23日 三郷村「非核平和三郷村宣言」
- ・ 同 12月23日 堀金村「非核・平和堀金宣言」
- ・1989（平成元）年12月21日 明科町「核兵器廃絶・軍備縮小・平和の町宣言」

その後、世界は、1987年12月8日の米ソ首脳による核兵器縮小合意、1989年11月のベルリンの壁崩壊、12月のマルタ会議により東西冷戦の終結へと進んでいく。

(2) 安曇野市

合併協議書に「宣言は新市において調整する」と明記されていた平和都市宣言は、2006（平成18）年9月議会において制定請願が採択された。当時全国自治体の宣言制定率は82.3%であった。

- ・2010（平成22）年1月1日 平和市長会議加盟
- ・ 同 6月1日 行政経営会議に提案
- ・ 同 6月21日 庁内プロジェクトチーム発足
- ・ 同 7月 小中高校生への意見募集
応募数小55、中30、高41 計126
- ・ 同 8月、9月 「平和への思い」一般募集111点
- ・ 同 10月、11月 パブリックコメント25点
- ・ 同 11月25日 議会全員協議会
- ・2012（平成24）年12月6日 市議会総務委員会可決
- ・ 同 12月19日 市議会本会議可決「平和都市宣言」制定

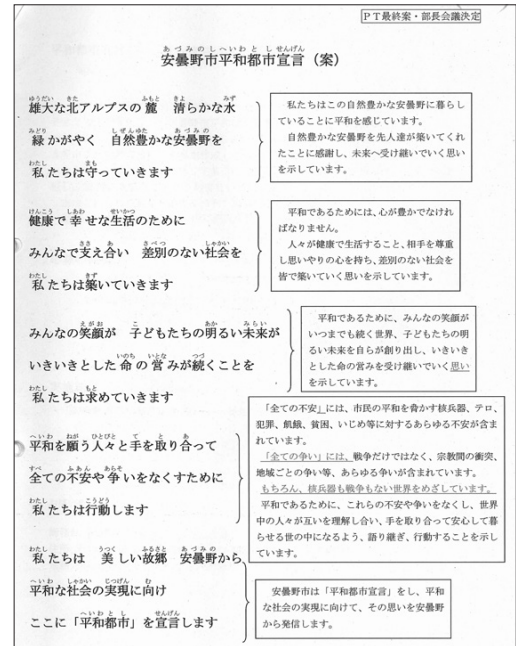


平成24年12月19日 議決文書
(安曇野市文書館)

5 平和教育

「安曇野市平和都市宣言」制定に向けて募ったパブリックコメント（総数25）の中に、宣言制定後の取組について4点の提案があった。

- ・安曇野市には、自由と平和を願った先覚者がたくさんおりました。萩原隼山：日露戦争を憂いて萩原十重十宛に手紙を書く（明治38年）、清澤冽：「この世界から戦争をなくすために僕の一生が捧げられなくてはならぬ」（昭和19年11月16日『暗黒日記』）、上原良司：「明日は自由主義者が一人この世から去っていきます」（昭和20年5月10日「所感」）顕彰活動を進めることが大事ではないか。
- ・宣言しっぱなしでは、何も残らない。
- ・宣言した後、それぞれが行動するよう、できるよう意識啓発を進めてほしい。
- ・宣言が平和について改めて考えるきっかけになれば良い。具体的に行動することが大切。



企画展関連講演会

「上原良春・龍男・良司 三兄弟の資料を通して見る戦時下の「自我」

1 趣旨

上原家では、太平洋戦争で三兄弟を亡くしている。慶應義塾福澤研究センターでは、准教授の都倉武之氏を中心に上原家に残る1万点近くの資料の整理研究を進めてきた。三兄弟が戦時下において、どのように自己を表現してきたのかを、それぞれが記した文章や残された写真等の資料を調査研究してきた成果として解説する。

2 日時 2022（令和4）年10月23日（日） 午後1時30分～午後3時

3 講師 都倉武之氏（慶應義塾福澤研究センター准教授）

*この講演会の記録は本号75ページより掲載している。

企画展関連企画パネルディスカッション「今、安曇野から平和を思う」

1 趣旨

安曇野市は10年前、平成24（2012）年12月19日に「安曇野市平和都市宣言」を制定した。当時の小中高校生126人、一般111人の皆さんから寄せられた平和への思いを綴った宣言文である。この宣言は制定することが目的ではない。この宣言文に綴られたひとつひとつの言葉に込められた思いや決意を、その都度確認する活動を行うことによって、生きた宣言文になる。今回のパネルディスカッションもその活動のひとつである。

戦争という非常時に生きた上原良司の姿に学びながら、また5人のパネリストの発言を通して、今日参加された皆さんとともに、今日まで続いてきた平和をこれからも維持していくためにはどうすればよいか。自分の生き方に問いかけたり、自分たちができることを共通理解し合ったりする機会としたい。

2 日時 2022（令和4）年11月20日（日） 午後1時30分～午後3時30分

3 基調講演

(1) 講師：大串潤児氏（信州大学人文学部教授）

(2) 演題「相手を理解すること～上原良司の思想を手がかりに～」

(3) 内容

はじめに………タイトルは「相手」となっていますが、「他者」ということばを使ってもよいと思います。その際、異なった文化・社会的出自（階層）という意味で「他者」を考えると同時に、「民族」と「民衆」という2つの視点にも注目したいと思います。植民地支配「帝国」であった日本の戦時下において「民族」は独特の意味をもつ言葉であったし、さらに「自由主義」思想の評価の焦点の1つはその「民衆観」によるのではないかと、という問題意識です。

I. 「自由」の自然性（本性）

(ア) 自由主義とは何だろうか？—その“根もと” ……「自由主義」という概念は1つの思想的立場（主義）ですが、その「根もと」にはどのような考え方があったのか、上原の言葉のなかから見ていきたいと思えます。例えば「人間の本性を考えた時、自由主義こそ合理的なる主義だと思えます」（「遺書」）、「人間性としての自由」（「修養反省録」1944.2.29）、「本性」、「自然性」（「修養反省録」1944.2.17、7.11）。こうしたことばから浮かびあがるのは、自由を否定とする「軍人」としての上原と、生身の上原と



の葛藤です。上原は「修養」のため「自由」を否定します。しかし、何度否定しても否定しきれません。つまりここで「自由」とは、否定しても否定してもわきおこってくる「内部生命」（＝自然性）とでもいべきものとしてつかまえています。また知性、文化＝芸術の評価にかかわって、知性や文化＝芸術は「国家目的」を強制されることにより「無価値」になるとも上原は述べています。彼らは「真の日本人」であるかもしれないが「知識人」ではない、とは痛切な批評でしょう。

(イ) 「自由主義」はどのような社会関係によって生まれ、支えられ、そして新しい出逢いを生み出すのか？ ……上原の「自由主義」あるいは内部生命感覚といったものはどのような文化のなかで生まれたのでしょうか。この問題は、近代安曇野地域社会思想史としてとても重要なテーマであり、また優れた研究成果もあります。ですからここでは上原の自由主義理解にとってあまり注目されていない視点として、「他者との「対話」の意味」ということを考えたいと思えます。慶應義塾大学時代の上原が残した日記に次のような記述があります。「夕食後、呉さんと議論。大東亜共栄圏のスローガンは時局日本が、自己のために他を用いるにあると主張するに対し、自分は否、共栄圏は理想であって各々所を得しむるにあり、その結果として、米英打倒に、アジア民族が歩を揃えるのだと主張す。呉さんは、日本が他国に独立を与えるのは、米英打倒に協力せしめんとするからであるとするに反し、自分は他国が日本の理想たる、各々所を得るといふ主義より独立を与えられ、その結果米英打倒に参加すると主張。九時まで論戦。良く考えれば、呉さんのいうことはもっともであるが、日本人としてその事に賛成できない。日本人同志なら勿論同意したであろう。しかし、このような区別を設けて考えることは、却つて呉さんをして自分が殊更に形式的に論じているとの感を与えたかもしれぬ。しかしあの場合、リアリストの呉さんに対しては他に方法がなかった。実際に、現実はそのようであるから、なお困った。—そうのこと呉さんの言うことを認めて、それがどうしたと高く出た方がよかったかもしれぬ。しかし議論すると気持ちがさっぱりする」（「朝日日記」1943.7.9）。

なかなか興味深い記録です。「呉」という人物は朝鮮からの留学生で、法政大学に学んでいたこと以外詳しいことはわかっていません。上原は朝鮮人と大東亜共栄圏の「理念」について議論をし、呉のことを「もっともだ」「現実にはそうである」（注－呉のいうとおりである）と述べているのです。この記録は現在でも多くのことを考えさせてくれるものですが、ここでは一言、戦争はこうした「他者」理解への志向をもった若い知性を奪った。そして、また議論の「場」そのものも奪った、ということを強調したいと思います。

II. 民衆思想の諸相—対話のよすが、上原が未来を託した人びと

(ア) 上原良司「所感」での「希望」 ……さて上原が残した記録には民衆への期待が記されています。「所感」では「一器械である吾人は何も云う権利もありませんが、ただ、願わくば愛する日本を偉大ならしめられん事を、国民の方々をお願いするのみです」とあります。表現は「国民」となっていますが、

上原が「希望」を託した「民衆」とは、いったいどのような「民衆」であったのでしょうか。

近現代日本において、民衆は地域社会において積極的に戦争を支える存在でした。上原のような知性はいわば少数派に過ぎなかったともいえます。ここでは「自由主義」の評価にも注目しつつ戦争を支えた地域社会の一事例として戦時期に作られた団体・穂高文化協会での議論を紹介しておきます。穂高文化協会は、明治から大正にかけての穂高地域文化を「私共が其処で身につけたのは、人格の尊重と責任の観念、英雄主義・出世主義を否定した分に生きる道でした（中略）自己を発見した、然も自己の信ずべく尊ぶべきを発見した時の私達の歓喜は大変なものでした」と評価しつつも、「それは一步を誤れば自己本位に墮するの危険を多分に包蔵するもの」としています。そしてその「危険」をもたらすものとして「自由主義・個人主義の名に於いて現在貶されている処のものは、さうした分あつて全体のあるを知らぬ愚かさ」と批判するのです（須坂国美「文化運動の一形態—穂高文化協会のこと」『地方翼賛文化団体活動報告』第二輯、1944.3）。穂高文化協会は、演劇活動の援助など地域文化の向上にも力を入れているのですが、同時に、「米利犬」（食糧不足の時代にエサばかり食べてアメリカを「利する」ムダな犬という意味）退治の活動と呼びかけてもいます（新聞記事によると、実際に多くの犬が撲殺されたようです）。文化運動も「何等戦力に寄与するなく、日本農民の生産を阻害しその食ふべきを横領する。正に利敵行為に等しい之等の野犬駄犬の一掃は（中略）当然の事（中略）たとへ可愛い犬ではあらうとも、その為不正行為さへ時にして、小さな未練に溺れ執着すに偏する如きは、共に戦ふ国民の真面目さでは断じてない」と非常にファナティックなものとなっていました（同上）。本来は文化向上を願う人びとの意識が、戦争協力と一致してしまっている、先の上原のことばが重要になってきます。

（イ）1945年4月の情景：銃後社会への「批判」—民衆をどのように理解するか……上原たち戦時期の教養ある若き知性は、こうした民衆をどのように見ていたのでしょうか。たまたま史料に遺っている2人の若ものの感想を確認しておきたいと思います。1人はもちろん上原良司、もう1人は長野中学校から海軍経理学校へ進み、敗戦後は旧制松本高等学校から東京大学に行くことになる白鳥邦夫です。この2人は、わずか1日違いで東海道線を西に向かっていました。上原は「或る者は雑談にふけり、或る者は悠々と煙草をくゆらし、クッションにもたれ、戦争何処に在りやという顔付をしている。これを余力と見て良いであろうか。それとも寒心すべき事と考えるのに無理があるだろうか。勿論如上の態度を取り得るのも、尊い戦死者のおかげである。車中の人、あたかもこれが当然のことであるかの如き顔をしている。我々が体当りした後も、幾日かはこういう風景が続くであろうことは、疑いの余地がない。日本人の戦争徹底視は、未だなつてはおらぬのだ」（「1945.4.5 東海道車中にて車内の風景（二等車）」（上原良司・中島博昭『あゝ祖国よ恋人よ』信濃毎日新聞社 2001、p.195）と記しています。民衆には「戦争がどのようなものか、わかっていないのでは」という批判とも読めます。白鳥邦夫は、その前日、同じく東海道線の車中にいました。海軍経理学校に入学のため旅の途中、16歳の少年でした。「朝は米原で明けた。二等車で車掌と争ったり、車中で個人主義思想の婆々と喧嘩したりして、春雨の東海道をうつらうつら走る。……大阪駅でルンペンを見て握飯をやった。およそ今日は世の中の暗い反面にいくつか触れてみた」（白鳥邦夫『私の敗戦日記』未来社、1966、p.53、1945.4.4の項）。白鳥の目には戦時下の「暗い反面」が見えていたようです。しかし17歳の「軍国少年」は、車中でおそらくあわてて席をとるなど（戦時中には多かったようです）のふるまいをする高齢者を「個人主義思想」として攻撃するようなエリート意識をもあわせ持っていました。若ものには民衆は度し難い「個人主義者」とも見えていたのです。

この日からひと月ほどのうちに上原は沖縄特攻作戦のなかで戦死します。白鳥は経理学校で敗戦を迎えます。敗戦後、白鳥は自身の戦争経験を次のように述べています。「たった16歳の青二才の少年を村

をあげて見送るという大げさな儀式（注－白鳥は1945.4海軍経理学校入校のための壮行会）の滑稽さと、その大人扱いにすっかり逆上させているらしい私がいる。というより、少年を少年らしくそっとしておいてくれない戦争の巨大な暴力に、すっぽりとつつまれて、英雄気取りになっている面がある」。そして、白鳥は生き残ったのです。「『英雄』はいまや一介の中学出の浪人におちぶれてしまった。だが考えてみれば、この姿が自然であって、少年を大人扱いしたり『英雄』にする時代は、きっと悪しき時代なのである」（白鳥邦夫『君が代』と『日の丸』と』安田武編『日本人への遺書』大光社 1967）。「少年時代」を「少年」として、「青春」を「青春」として生きることが出来なかった悔恨と怒りが読みとれるでしょう。

こうした民衆にどのような「未来」を期待するのでしょうか。上原の望みは「所感」というかたちでしか残されませんでした。一方、白鳥は旧制松本高校在学中から『山脈』（当初は『名もなき花』）という文芸誌を創刊し、さらに民衆の歴史、「底辺の歴史」を掘り起こすサークル活動を全国のなかまと進めていくこととなります。「戦争と民衆」をめぐる上原や白鳥の問題意識は、どのように「継承」されたのでしょうか。

『山脈』にも参加し、上原良司研究の基礎を築いた中島博昭さんは「戦争と民衆」を考える際の問題意識を次のように述べています。「僕たち自身が《日本の底辺の民衆の一人である自分》であるならば、学校寄宿舎の炊事係のおばさんや農民を記録することは、同時に自分を掘り起こすこととなります……民衆は雪崩のように戦争に参加したこと、そして僕たちが民衆の一人であるなら、不断につきの時点ではファシストや戦争協力者になる可能性をもっていること、したがってまさに、自己にたいする抵抗のために、寄宿舎のおばさんの談話を記録するものである」（中島博昭の1959年「山脈の会」第1回全国集会での発言、白鳥邦夫『増補版 無名の日本人』未来社1978、p.134～135）。民衆は「雪崩のように戦争に参加」したことへの痛覚、であればこそ、そうならないためには民衆を「他人ごと」のように批判するのではなく、自らも「ファシスト」や「戦争協力者」になるかもしれない、そんな「自己にたいする抵抗」として問題をつかまえる必要があるとの指摘はとても重要です。

「他者」である民衆を理解するとは、「他者」の思想や行動を、自分自身の問題としてとらえるということになります。つまり、私たちは、上原のように優れた戦時中の思想を学ぶことのみならず、戦争になだれこんだ「民衆」を内在的に理解する必要があるのです。上原が期待をかけた、しかし同時に戦争協力者でもあった「国民」のすがたを何のために理解しようとするか、それは「そうなるかもしれない」自分自身を理解するためでもあるのです。

Ⅲ. どう語り継いできたか、どう語り継ぐか？—戦後の問題

この「戦争の時代」にあって、私たちはなぜ、「平和を考えていく」ことが必要なのか、戦時中のことがらと同時に、戦争の経験を戦後の私たちはどのように考え、戦争経験をとらえなおしつつ「平和の道」を模索してきたのか、こうした観点—つまり戦後現代史そのものを見ること—も重要なテーマとなります。

上原良司の文章が載った「きけわだつみのこえ」は、よく知られているように戦後平和意識の基礎を創った文献の1つです。1947年、東京大学戦没学生手記編集委員会編『はるかなる山河に』（東大協同組合出版部）刊行をきっかけにして全国の大学・学生の手記が集められ、1949年10月、日本戦没学生手記編集委員会編『きけわだつみのこえ 日本戦没学生の手記』（東大協同組合出版部）が刊行されます。1950年4月には日本戦没学生記念会（わだつみ会）が結成され、同じ年、映画にもなりました（『日本戦没学生の手記 きけ、わだつみの声』関川秀雄監督、東横映画）。朝鮮戦争の時代の出来事です。

しかし、『きけわだつみのこえ』初版に収録された上原の記録は「遺書」でした。私たちが上原の思

想や、彼の行動を詳しく知ることが出来るようになるのは、1985年上原良司・中島博昭編『あゝ祖国よ恋人よ』初版（昭和出版）、1995『同』新版（信濃毎日新聞社）、そして「所感」を掲載した新編『きけわだつみのこえ』（岩波文庫版）の刊行を待たねばなりません。ですから、「他者」理解ということではとても重要な「呉」という人物との対話のエピソードも、こうした過程のなかでようやくあきらまになったことです。学徒兵が、同じく「学徒」でありなかには特攻隊員ともなったものもいるアジアからの留学生＝他者とどのような対話をしていたのか、という貴重な経験もほとんど知られないままになっていたのです。まさにその意味でも姜徳相がいう「もうひとつのわだつみのこえ」だったのです（姜徳相『朝鮮人学徒出陣』岩波書店 1998）。

とはいえ「他者」理解のための営みがまったくなかったわけではありません。「きけわだつみのこえ」に関連していくつかの事例を見ておきましょう。1つめは、「わだつみのこえ」の受けとめ方に関連して、下伊那郡松尾村での「平和」討論会の事例です。1950年6月、朝鮮戦争をきっかけに松尾村では平和をテーマにした「村民大会」（討論会）が開催されました。松尾中学校では映画「きけ、わだつみのこえ」を観賞しています。映画を素材とした教育を実践した藤本三郎は次のような経験の持ち主でした。「昭和十六年春当時朝鮮総督府の公募によりこの作者黄〔注－創氏改名により共田、陣中の詩が紹介されている〕以下四十名の青少年が私の部隊へ入隊した。やがて部隊は多くの将兵の中から前歴が国民学校の教師であるという理由で、私を選んでこれら青少年の教員に任かせた。（中略）私は彼等との生活を続けることによつて、如何に日本及日本人が、朝鮮及朝鮮人について認識不足であるか、という事と、朝鮮統治から支那事変に至るまでの、日本の国是がいかに誤つたものであり、しかも彼等が、骨身に徹してこれをいやがり、日本人を軽蔑しているかを、詳しく知る事が、出来た（中略）終戦により、私ははじめて彼等に対する嘗つての同情の立場から、一転して血涙を以て味わう共感の立場に自分が置きかえられていることに気づいて、感慨を新たにすると共に、重大な決意をせざるを得なかつた」。そして藤本は、「今回生徒の「きけわだつみのこえ」の感想文を読んで、実にさまざまなことを、思う。この率直な、そして純真な「戦争をいやだ。」と言い切つて、戦争の野獣のような非人間性をにくむ心持ちを、どのようにして、しつかりしたもの育てあげるか」と決意を語ります（藤本三郎〔松尾中学校〕「彼の悲歌」―生徒たちの作文を載せるに当つて『松尾村の新聞』37、1950.9.1）。残念ながら戦争と民衆、植民地での経験が彼の平和教育論にどのように具体化されたのかはわかりません。しかし、少なくとも植民地支配への批判の眼を朝鮮人との付き合いの中から育てていた藤本の経験は、「呉」と上原が対話したのと同様な経験であったと思います。

また1953年、浅間山演習地化反対運動のなかで下伊那郡のとある若い女性は次のように述べています。「アメリカ兵に対して、強いくしみと怒の涙がとめどなく流れる。しかしかつて、日本軍も外国で、こんな事をしたのではないだろうか？と頭に浮んで来る。日本人もこんな事をしたら……日本人に犯された幾多の女性におわびしなければならない。“アジアの女性のみなさん、日本人の犯した罪を許して下さい” どんなに憎んでいる事でしょう」（関島「読書感想 『日本の貞操』を讀みて」『ぐんせい』第8巻第3号、1953.8.10、下伊那郡青年団協議会機関紙）。浅間山演習地化反対運動には、信州大学教育学部を中心とした「北信わだつみ会」も参加しています（『信濃毎日新聞』1953.6.7）。「北信わだつみ会」は、機関誌『一粒の麦』を刊行していましたが、現物未発見のため彼・彼女たちが「上原良司」や戦時性暴力をどのように理解していたのか、議論していたか／いないか、は不明です（『わだつみのこえ』45、1953.4.23）。ただ藤本三郎の事例とともに、記録に現れる限りではわずかな事例ですが、戦時中の「他者」との対話、その経験を手がかりに戦争と民衆、戦争と平和を考えていた人びとがいたことは戦後現代史のなかでも見失ってはならないことだと思えます。

おわりに

いくつかの問題を指摘して結びたいと思います。第1に、上原のように戦争に「抵抗」しえた人びとの「自由主義」の思想は、何よりも「人間の本性」「内部生命」（例えば近代日本を代表する平和主義者の1人・北村透谷のいう）を基礎にしてとらえる必要があることです。その意味で「自由」は「いのち」への視線をふまえて最も戦争に拮抗する思想であるのではないのでしょうか。第2に、その際、「他者」への視線／「他者」との対話＝人間の尊厳への視線が、「自由」と戦争を考えるためのもう1つの柱とならねばならないこと、です。そして第3に、平和とは、「自国のことのみに専念」（日本国憲法）しては構想され得ないのですが、同時に、ともすると「戦争になだれこんでしまうかも知れない自分自身」を常に問い続けることが重要でしょう。こうした思考を続けるなかでこそ一つまり「考えること」をやめないなかでこそ、「平和」や「自由」の意味の再定義一つまり戦争の時代をのりこえる思想が生まれるのではないか、そう私は思います。

4 パネルディスカッション

(1) パネリスト ＊コーディネーター：平沢重人（文書館長）

- ・大串潤児氏（信州大学人文学部教授）
- ・矢野司氏（安曇野市教育委員会指導主事）
- ・小澤すみれさん（長野県豊科高校2年生）
- ・足立翔さん（安曇野市立穂高西中学校3年生）
- ・岩田さくら子さん（安曇野市立穂高西中学校3年生）



(2) 内容

討論の概要を中学生と高校生の発言、フロアから参加された方の発言、そして5人のパネリストが最後に発言した「参加しての感想」から紹介する。

①ロシアとウクライナとの戦争について

足立：ウクライナが降伏すれば、一番早く戦争が終わると思うけれど、領土を失うことになるので、一番したくないこと。それを避けて戦いが続いてしまっていて、ウクライナの意地をすごく感じています。ゼレンスキー大統領の発言をSNS等で見ると、冷たく見えてしまう。国民のことを考えているのかと思ってしまう。

小澤：テレビで苦しんでいるウクライナの人たちを見ると、戦争は多くの人たちを傷つけてしまうので、絶対に避けなければいけないし、早く終わらせなければいけないと思うのですが、終わらせるためには、どちらかが大きな損害を受けてしまう。かなり難しいことだと思う。侵攻というとロシアが悪く見えるけれど、ロシア側にも正義があって、どちらにも言い分があってゆずらない。とても難しいことだけれど、この問題の解決として、暴力とか戦争とかが使われてしまうことは悲しいこと。



岩田：この戦争に終わりがあるのだろうかという疑問に思う。ウクライナがロシアに負けないように武器を支援しているとテレビで聞きます。それは戦争の終結にはならないと感じています。

小澤：たとえば、学校生活では、けんかがあった時は、誰かが仲介に入って話し合いで解決したり、仲の良い関係にならなくても距離をおいたりという暴力以外の方法で終わらせることができる。国どうしの言い分とか正義が曲げられない、譲れないものだったら、戦争によって奪い合うし

かないと思うと世界から戦争を消すことはとても難しいし、どう終わらせればいいのか。クラスで話すことは、物価が上がったりとか生活に関わったりすることはある。どうやったら終わらせることができるのかというのは、わからないし、不安とかが大きいです。

②これからどのようなことに注目していきたいか。

小澤：戦争について以前までは、昔話のように聞いていた。映画の「永遠のゼロ」も見たけれど、現実的なものとして見てはいなかった。今、戦争を身近に感じている。自分ごととして、戦争や平和について感じていきたい。

足立：ウクライナ側とロシア側で食い違っていることが多くある。どっちを信じるか。信じたい方を信じ、真に受けている。本当なのかなって思って聞いていくことが大事。ロシアが何で侵攻しているのかというのもよくわからない。情報の正しさについて考えていきたい。



岩田：戦時下の中でどう生きてきたのか。戦闘機に乗ったりするのも人間、兵器を作ったりするのも人間。どう考えているのか人間の意識について考えていきたい。

フロア：孫が小1と小4にいます。ラジオを聞いているとウクライナのことが一番に流れます。最近は、「ほく聞きたくない。早く終わってほしい。」と言っています。中学生、高校生がこれからのことを考えると不安な気持ちが多いと思うけれど、こんなふうにしっかりと考えている。こんなお兄さんやお姉さんがいたってことを帰って孫たちに伝えていきたいと思います。

③日本は戦後77年間他国と戦争をしてこなかったということについて。

岩田：ひとつめは、憲法に定められているからで、第9条に記されている。二つ目は、77年前に起きた戦争の悲惨さを伝え続けてきたことにあると思う。

小澤：憲法で平和を守ると定め、平和の尊さを後世に伝えようとしてきたからだと思う。

④77年間戦争をしてこなかったという日本をつくってきた先人がいる。自分たちはこれからどんな生き方をしていきたいか。

小澤：世界のいろんな人と話をしたいし、文化交流もしていきたい。国どうしが譲れないことが出てきた場合に戦争という選択をしないように、話し合うことをあきらめたくない。平和について考え続ける姿勢が大切だと思う。

フロア：私の出身は、沖縄の石垣島です。中学を出ると島を離れ、機械が好きということで航空自衛官になった。戦闘機の整備士として2年間勤めた。そして、制服を着て島に帰ったら、島の人たちから「そんなところに身を置くような奴は、帰れ」と言われた。そして自衛官をやめた。今は、ものを書いたり、新聞に投書したり、平和に関わる書物を読む読書会を企画したりしている。私は対話、話し合いのもとで物事を進めることが大事だと思って活動しています。そんな話をする、平和ボケだとか、理想主義者とかいわれますが、私はそういう人に逆に、軍事ボケと言ってやりたい。

フロア：自分に何ができるのかを考えさせられる時間でした。私は、娘も含め若い子たちを守りたいと思う気持ちが強くあります。保育士をしています。今、情報があふれていて、園児たちはブロックで戦車をつくるんです。戦争について聞いてもわからないと答えます。でもここで起きたら困ると答えます。自分も戦争の経験はないし、本当にわからないことが多いです。小さい子たちとも、娘とも考えていくことを続けていきたいと思いました。

フロア：77年間戦争をしてこなかったということは確かですが、日本にある米軍基地から朝鮮清掃やベトナム戦争に参加した爆撃機がたくさん爆弾を落としてきたという側面があるということをお忘れはいけません。今、敵基地爆撃能力を持たないといけないとか軍事費を増やさないといいとかが論議されている。これは、今までの日本のあり方から大変換になることです。1945年に戦争が終わって、これから日本は文化国家、平和国家でいくんだ。戦争で使ってきた予算を文化、教育、学問とかに、これがこれからの日本のあり方だと強調された。その精神が現在、まったく失われて、逆になっているような機運が出ているような。77年前はそうではなかった。あれは、どうだったんだということを私たちは考えなくてはならないと思う。

⑤パネリストのパネルディスカッションに参加しての感想

岩田：中学生だけで意見交換をしても、今日のように広い視点で深めることはできないと感じました。私は、広島平和記念式典に参加したり、パネルディスカッションに参加したりして、戦争や平和について考える機会がありました。でもはっきりとした答えは出ていません。より多くの人とこの世界で起きている争いについて考える場が必要だと思って、そんな場に参加していきたいし、平和について考えることを継続していきたい。

足立：新しく気づかされたことがあって、戦争の始まり方に注目がいってしまっていて目的は何なのかとか。終わり方って始まったら考えられない。今までの戦争ってどうやって終わっていたのかを考えることは、自分にとって新しいことで、今回参加させてもらってよかった。SNSでは、若者が遠くから戦争に関わることができる。始めさせたり、終わらせたりすることができると思う。若者が戦争に関わるという点では、同じかなと思う。目の前で同じこと起きているんだけど、今までとは違う視点で見ることができるようになった。

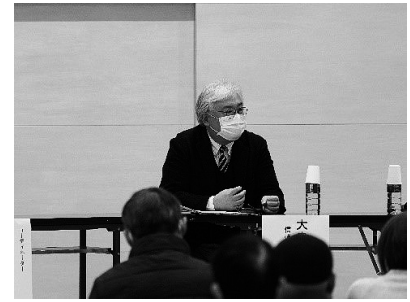
小澤：普段は聞けないような話を聞けて、このような会に参加できてうれしく思う。対話をする前は、とにかく戦争は反対だという立場でここに立っていたけれど。今、軍事力を強くという声が大きくなっている。北朝鮮とかそれに対する対策や兵器の開発を進めるべきだと考えていて、対抗する力をつけないといけないという考えを自分が無自覚の中で戦争に流されてしまっている。もし他国が攻めてきたらそれに対応して、話し合いということではなく暴力で、知らず知らずのうちに戦争という手段を考えていたことに気づけた。今回、戦争の話を書いたり、戦争に近い人たちの話が聞けて、本当によかった。

矢野：情念と知性という言葉が印象に残っている。私は、小中学生に対して、彼らが一人一台ずつ持っているクロムブックの活用を推進する立場にいる。得られる情報の中には、疑念を含んでいるものがある。しかし発信されている情報を遮断することはできない。どのように情報を使っていけばいいのか、どのように解釈していけばいいのかについて小中学生に考えさせる場を持たせなければならない。また戦争や平和について子どもたちに考える機会をもたせるようにつなげていきたいし、自分自身も学び続けていきたい。



大串：大学では、韓国のゼミと交流をしています。もうすぐ退職となる交流相手の方が言われたのは、「外国、他民族でもいい。そこに友だちがいるってことはとても大事なことだよ」ということです。顔が見えるから。例えばウクライナに共に時間を過ごした友人がいるということは、この戦争を理解するのに大きな力になる。こうした日韓交流のなかで教えられたことが、今日「他者を理解すること」という話をしようと思ったことの原因のひとつです。もうひとつは、上原良司

です。上原は、自由主義者であった。そのことがクローズアップされているけれど、等身大の彼は、恋もするし、悩みもあるし、酒も飲んだ。矢野さんが言ってくれましたが、上原と白鳥邦夫を並べたのは、やはり「戦争と平和」の問題を考えるには情念と知性と両方が必要ということです。情念つまり素朴な感情でいえば、「どうして世界は仲よくできないのか」、そういう問いを常に持ち続けることが大事でしょう。他方で、今、戦争を支えることが出来る社会が作られつつある。そういう社会のあり方をきちんととらえる知性が求められる。しかし、情念だけだと理想論だとか、感情的だとか、平和ボケだと言われる。ただやはり「戦争はいやだ」という情念と、社会のあり方、時代の構造を見つめる目つまり知性と、その双方を持つことです。参加者の保育士さんが話してくれましたが、今、子どもたちがどのような経験を積んでいるのか、がすごく大事。そこで培った経験が中学生や高校生になった時にどう生きてくるかです。情念と理性がどこかで相互に関連付いてくる。小澤さんは、「答えが出ない」と話してくれたけれど、出なくてOK。問題はそう簡単ではない。悩んで悩んで、考えていく。「戦争はいやだ」という情念はそうした理性の営みを根っここのところで支えるのかもしれない。情念と知性がうまくリンクするステップになる。



司会：大串さんはパネリストとフロアの方、一人一人の方をお名前を挙げて話をされた。一人一人を大事にされている姿であり、平和につながるキーワードになる。中学生や高校生が自分の言葉で語ってくれた。発する言葉を考えながら間をおきながら。そんな中学生や高校生の発言をつくってくれたのは、今日ここに参加してくれたすべての皆さんです。